

JFMA

第2回秋季週末セミナー

ユニバーサルデザインで考えるオフィスデザイン

パネルディスカッションの様相



(社)日本ファシリティマネジメント推進協会 (JFMA/会長・鶴澤昌和氏) は10月4日、東京・江東区の東京都現代美術館講堂で「秋季週末セミナー」を開催した。第2回目の今回は、「ユニバーサルデザインで考えるオフィスデザイン」がテーマ。公共機関をはじめ、各方面でユニバーサルデザイン導入の動きが加速しているが、オフィスの現状はどのようなになっているのか。オフィス家具業界各社の開発キーパーソンが、自社の取り組みや今後の課題について講演を行った。

少子高齢化、障がい者の社会参加や企業の国際化などの影響で、ワーカークの多様化が進んでいる。また、工業社会から知識社会への移行が命題とされている中、単一的な思考よりも多様性が重要視され、企業ではこれまでの平均的なワーカークを想定した空間づくりから、広範囲で多様なワーカークへ配慮したワークプレイスへの変革が求められている。企業の社会責任や企業イメージなどCSRの視点とともに、二〇〇二年のハートビル法改正によるバリアフリーの努力義務化や、自治体等による企業の障がい者雇用率公表など、制度面からも企業にとってワークプレイスへのユニバーサルデザインの導入価値が高まっている。JFMAのユニバーサルデザイン研究部会(部会長・似内志朗氏)では、今年九月から二月にかけて、毎月一回、土曜日に「オフィスのユニバーサルデザイン」に関するセミナーを計



似内志朗部会長

四回開催している。今回のセミナーはその第二回目。オフィス家具メーカーからこの分野のキーパーソンを講師として招き、各社の導入事例や今後の方向性・課題について発表が行われた。開催に先立ち、似内部会長が次のように挨拶した。「当部会では、オフィスやワークプレイスを対象を絞って六年ほど前から研究・発表をしています。現在では各メーカーで主軸として研究・開発されているユニバーサルデザインですが、私どもが研究を開始した当初はそれほど注目されておらず、ニッチな部分として取組んできました。ガイドラインと総合評価手法の作成やケーススタディなどを行い、その研究成果をまとめたものも三冊発行してきました。九月の第一回セミナーでは、「企業経営とオフィスのユニバーサルデザイン」と題して行い、好評をいただいた。今回は、オフィス家具メーカーでユニバーサルデザインの分野で活躍している四名の方に、オフィスデザインの視点からお話をさせていただきます。」

第1講

パワープレイスによるユニバーサルデザインの取り組み

●間瀬樹省氏 (パワープレイス株)



内田洋行グループでは、一九九九年からUD推進チームを発足し、二〇〇三年にはオフィス部門で視覚障がい、車イスでの操作など二〇項目の認定基準を設け、著名なユニバーサルデザイン推進者の鴨志田厚子氏(鴨志田デザイン事務所代表)監修のもと、ユニバーサルデザイン商品の自社認定を開始した。

はじめは、基準を甘くしてユニバーサルデザインの認知度を高めることに注力。その後は、基準を厳格化し質の向上を目指す。最終的には、ユニバーサルデザインが開発の必須基準になり、特記しなくなることを目標に掲げている。すべての人に使いやすいデザインではなく、使える人を今よりも増やす

方向で開発していく。

オフィス・学校の将来像を実現する一つのアプローチと考え、人間中心で快適、安全、衛生的なモノと環境づくりを推進。製品本体だけでなく、ソフト面のユーザビリティ向上も目指す。

デザインのプロセスとして、現状把握調査を重視。使いやすさは利用者には確認する以外に評価の方法がないと考え、客観的評価ができるように、使う様子を観察して数値化。また、車イス体験や高齢者体験を行い、実感から不便さ解消の糸口を探る。従来の、機能を付加していく商品開発ではなく、正しい知識を持ったメンバーで正しいプロセスで取組むことが肝要としている。

具体例として、導入事例もいくつか紹介した。東京・御茶ノ水の井上眼科クリニックでは、患者と職員双方に調査をくり返し、誘導サインのピクトの形状や文字フォント、色彩、文字情報量など、視覚障がい者にも見やすく、デザイン性にもすぐれた空間を提供した。また、昨年竣工した東京・千代田区役所にも、同様のプロセスでデザインしたことを紹介した。

第2講

コクヨにおけるユニバーサルデザインの取り組み

●竹綱章浩氏 (コクヨ株)



ユニバーサルデザインに対する考え方としては、次の三点が挙げられる。①身体能力の低下などにより見えてくる、一般製品の欠点を解消すること。②一般ユーザーと障がい者双方にとって使いやすいものを開発すること。③一般製品がカバーする範囲を広げ、福祉介護用品までの空白を補うこと。

開発プロセスは、硬い、重い、痛い、危ないなど多数のバリアを、「基本性能・安全性・デザイン性・操作性・情報の認知性」の五要件で解決する。加えて、従来品と遜色ない価格設定を必要条件とする。

仮説設定からモニター調査、内部評価とユーザー評価を経て、細部修

正し最終チェックを行う。製品化後も評価を行い、改善や新製品開発につなげる。

事例として、ハサミの最高峰を指した「テビタ」の開発を紹介。手指障がい者や小学生から高齢者へのモニター調査、紙粘土の試作品を用いて研究を繰り返し、片側オープンハンドルと、面積あたりの負荷を低減する形状、エラストマー樹脂のソフトな触感で、痛みの解消と握りやすさの両立を実現、多様な手のサイズと握り方に対応、価格面でも複数のモデルを展開し、異なるニーズに対応する製品を完成させた。

製品への不満や期待をくみ取り、多様なユーザーと企業の意識統一、ベンチマークのすり合わせを図ること、ユニバーサルデザインの実現が可能になる。従来品から適合する要素を発掘、従来品の改善改良、次世代製品の開発の段階を経て、開発していく。

今後は、製品だけでなく商品情報発信やメンテナンスから廃棄方法まで、ユーザーを取り巻く環境を総合的に捉えることが必要になる。ユーザーの多様性からの発想や気づきから新しい価値を創造する。

Accuride®
ス・ラ・イ・ド・シ・ス・テ・ム

即戦力。

収納部を上手に、使いやすくするために……。
アキュライドのスライドレールが
機能性アップと付加価値向上を即実現します。

家具専用シリーズ

C2632



※パテント出願中

C3832



※パテント取得済み

C3005



※パテント取得済み

C7432



※パテント出願中

C2132



※パテント取得済み

スライドレールで業界No.1の実績をもつアキュライド。
あらゆる設計仕様に応えるワイド・バリエーションをラインアップ。
サイズ・モデルを豊富に取りそろえた標準品スライド群から
貴社の設計仕様に最適なシステムが即導入できます。

- レール厚み 12.7mm
- 同一製品に取り付け可能
- 取付簡単、出し入れ容易

<http://www accuride.co.jp/>

スガツネ工業株式会社

アーキテリア事業部 東京都千代田区岩本町2-5-10 〒101-8633 TEL.03 3864 1122 (代)
東京ショールーム 東京都千代田区岩本町2-5-10 〒101-8633 TEL.03 3863 6888 (代)
大阪支店・ショールーム 大阪府大阪市中央区内港路町2-2-6 〒540-0038 TEL.06 6910 1122 (代)
仙台営業所 TEL.022 716 1122 (代) / 名古屋営業所 TEL.052 982 1122 (代)
福岡営業所 TEL.092 461 1122 (代)

日本アキュライド株式会社

製造元 *詳細については、資料をご請求ください。
東京都千代田区神田淡路町1-4-11 友泉淡路ビル9F 〒101-0063 TEL.03 5209 7401
大阪市北区南森町1-3-27 南森町丸井ビル5階 〒530-0054 TEL.06 6364 6331

発売元
SUGATSUNE

イトーキのユニバーサルデザインポリシーと事例

●加藤雅士氏 (株)イトーキ



実現の指針を分類すると、次の五項目になる。
①あたま/認知や理解が容易なこと。イメージできるカタチや色、みんながわかる言葉や記号、一般化された常識②感覚/感性や特性に配慮すること。よく見える、よく聞こえる、触ればわかる③からだ/身体的

企業ポリシーとしてUD&Eco style (ユニバーサルデザイン&エコスタイル)を掲げている。少子高齢化で人口減少社会を迎えるにあたり、高齢者自立や男女共同参画障がい者共生実現社会が求められている。最適環境提供をコア事業とし、誰もが暮らしやすい、使いやすい、満足できる心豊かなユニバーサルデザイン社会の実現に寄与していく。

負担が少ないこと。姿勢、動作が楽な工夫、弱い力で使える工夫、操作性の向上④安心⑤自由度

具体的製品への展開例として、オフィスチェア「スプレーナ」を紹介。ユーザーの大部分が多機能チェアの機能を使いこなしていないことから、操作方法のピクト表示や、取扱説明書を座面後ろに収納できるなど、ユーザー視点の気遣いも搭載した。また、「カシコ」チェアは女性の骨盤形状に適し、さらに足元をきれいに見せる座面形状や筋力に合わせたロッキング角度など、独自の工夫を凝らしていることを紹介した。
「製品」は人間の多様性に対応し、なるべく多くの人が使えるもの。「空間」は製品の組み合わせやレイアウト設計などによって快適な空間を創造する。「社会」はお互いを理解し、思いやりある行動をする。製品だけで解決するのではなく、トータルに具現化すること。また、こうした考え方を広めて社会全体の意識向上につなげていく。このほか同社では、国際UD会議への参加、エコプロダクツへの出展、季刊誌「UD&Eco style」の発行、セミナー・講演会での啓蒙、学会協議会等にも積極的に参加している。

コミュニケーションシーンにおけるユニバーサルデザイン

●鈴稚隆氏 (プラス株)



場所であり、討議型、発案型、意思決定型のミーティングで、参加しているすべての人が立場を超えて発言し、お互いを尊重しあい、創造性を発揮できる環境を創出することが、コミュニケーションにおけるユニバーサルデザインと考える。
群馬県前橋市にある郊外型産業複

二五年ほど前から、空間と情緒という環境テーマをベースに、「個」と「集団」をつなぐコミュニケーションが、オフィスにおける創造活動の核になると考えている同社、コミュニケーションシーンでのユニバーサルデザインを取り組みを紹介した。
オフィスは、個人の知を編集・統合して新しい知を産む、個と集団の

合施設「プラスランド」内の「音羽倶楽部」では、人と空間の相関性やユニバーサルデザインの研究など、さまざまなコミュニケーションシーンの実験検証を実施。同施設はコミュニケーションの型にあわせ創造活性型、プロジェクト型、多目的型など多様なスペースで構成されている。創造活性型のトリオルームは、空間の連動性と可変型テーブル、窓からの景色、壁面ホワイトボードなどが特長。会話の長さやフリックカーブなどを検証して発案型、意思決定型、討議型それぞれに適したレイアウトが研究されている。
また、各スペースには丸や三角など多様なテーブルが配置され、参加者の視覚がコミュニケーションに大きな影響を与えることから、席配置とコミュニケーションの関連性も検証していることを紹介した。
* 四氏によるセミナー終了後は、似内部会長の進行でパネルディスカッションが行われた。
なお、今回は一月一五日(土)、「ユニバーサルデザインの計画手法」をテーマに開催される。
▽問合せ先・JFMA
TEL.03 (6912) 1177